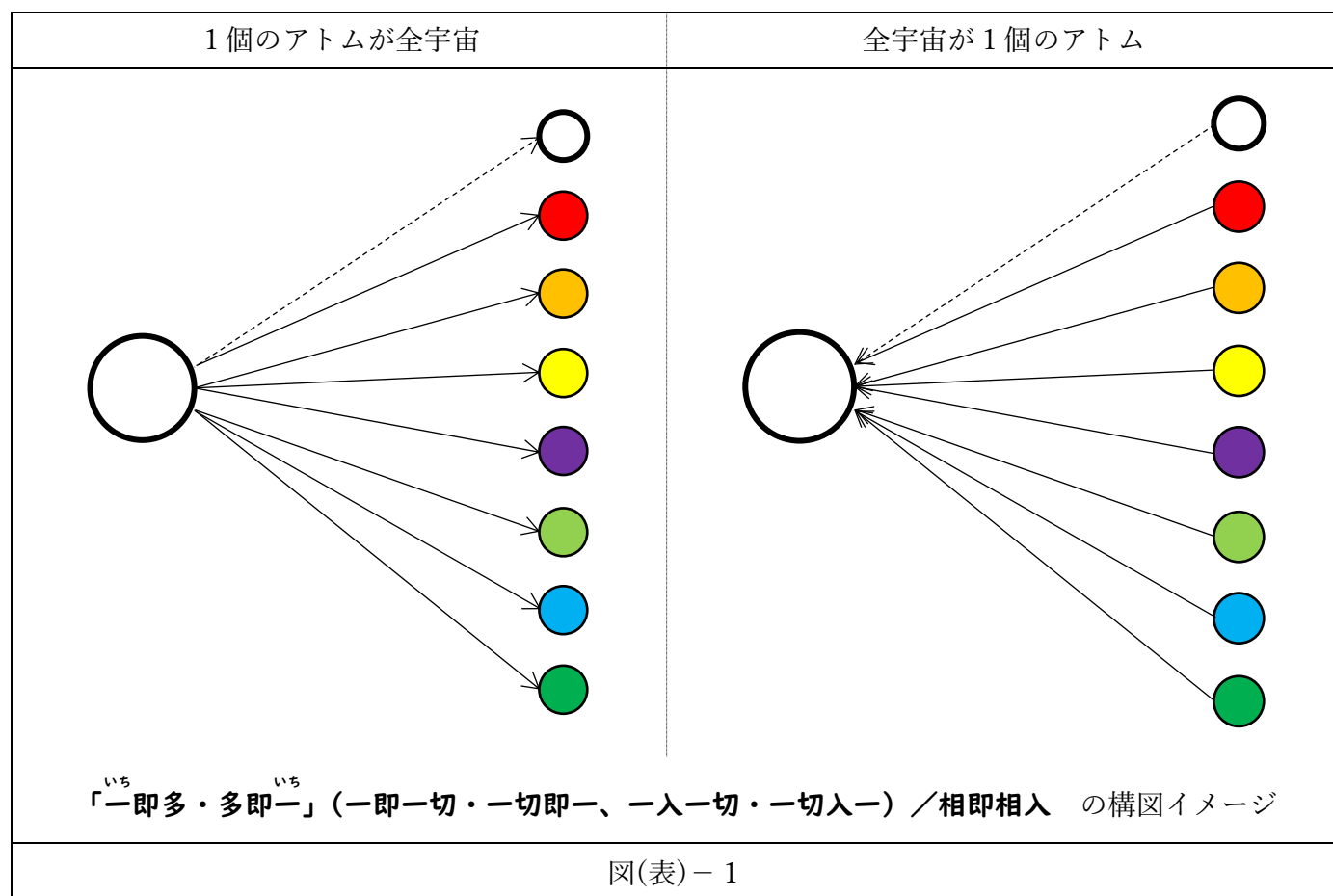


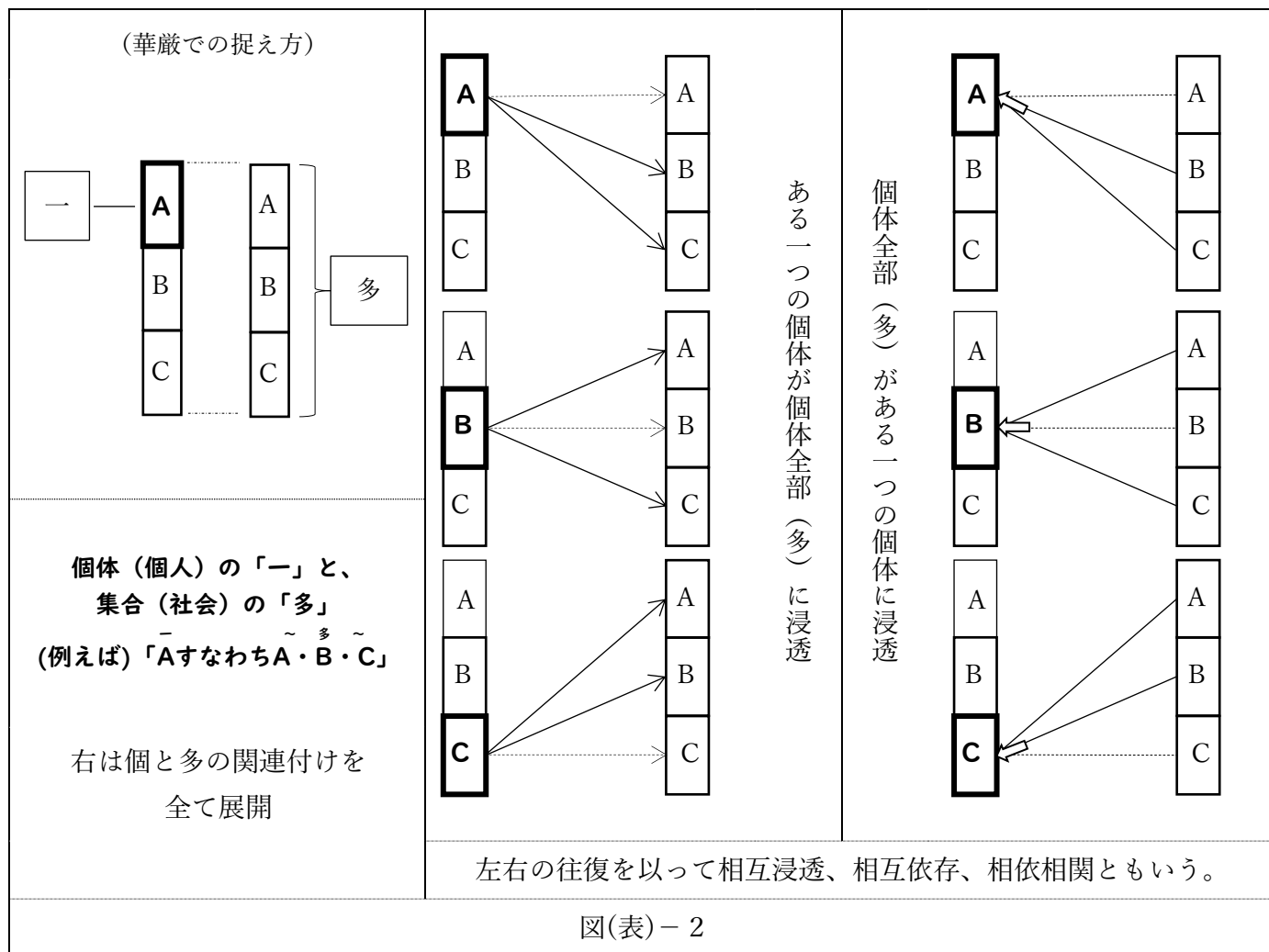
最新（最先端）科学の研究者等から、この宇宙の実相は、「眼前の見える宇宙」と、他に「見えない別宇宙」があって、両方が表裏一体・対になっている、並立しているのだというニューサイエンの分野が活発になっている。哲学——宗教（仏教）・心理学と科学が接近し、神髄（究極）においては重なるという。

この世の森羅万象を二つの切り口で攻めて行くとどうなるのか。一つはどこまでも広げて行くマクロ拡大視点、もう一つは何処までも切り刻んで行くミクロ縮小視点、いずれにしても行き着く無限点先においてはただ一つ、『真理』（華嚴界 ZPF）に行き着くとされる。霊界・オカルトの世界では無い。

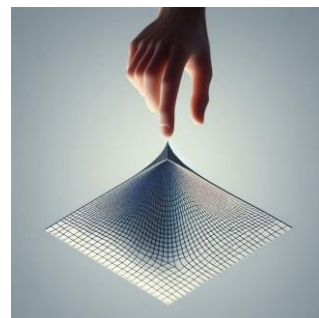
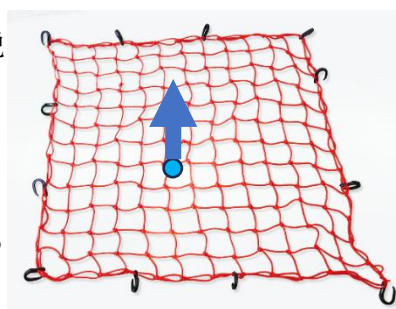
1. 華嚴経から学ぶ基本

そもそも、仏陀（お釈迦様）が悟りを得た時「我与大地有情同時成道」——私と大地の生きとし生けるものはみな繋がっている、と話された。「我与大地」（私と大地）は「見える世界」、しかし、その有情は「見えない世界」、その二つが「同時」で「道」（宇宙）が成っていると悟った。図(表)－1・2を参照のこと、簡単に記述する。人間が覚知する森羅万象「もの・こと」は某一つの個体が集合群個体全部（多）に浸透している、集合群個体全部（多）が某一つの個体に浸透しているという「一即多・多即一」の考え方を基本に置き、人間を含めた現実のこの世のあらゆる「もの・こと」は単独では存在し得ず、お互いが原因となり結果となり、主客の立場が入替わり、連鎖の網で結ばれた存在である、無限の個別集合体、相互関連性・相依相関ネットワーク（縁起）の賜物だ、あるいは簡潔に「もの・こと」は縁起の結実であると説く。





華嚴経ではこの世界を「因陀羅網」を以って説明することがある、例えば図(表)-3において、どこか一つの結び目を持ち上げると、隅々まで全部が引き上げ効果の影響を生ずることとなる。網は見方によっては循環の相を持つものである。



図(表) - 3

2. 遠近複眼

(1) マクロ／遠視的拡大・巨視化視点～哲学的(仏教的)視座

この「縁起」の見方を以って諸々の関係性をどんどん広げて行く、例えば私と貴方、係る仲間(相手)をどんどん増やして行くと、宇宙の大いなる循環においては、他の生物(動物・植物)とも、有機物・無機物とも皆繋がっている、結ばれている、と思考を無限点まで拡張して行く。すると私(自分)と他者との境目が薄れ自己存在意義(私という型枠、我執)はどんどん消え失せて行き、その先の無限遠点は『無・空』の世界になるという。私はこの究極界を「華嚴界」と称している。

(2) ミクロ／近視的縮小・微視化視点～科学(物理学)視座

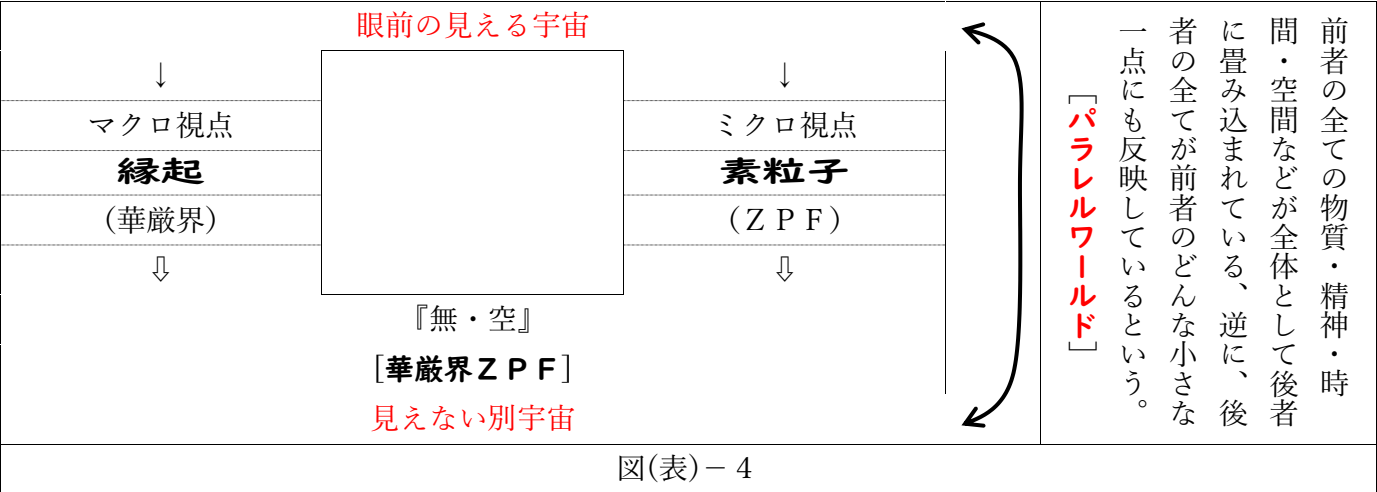
人間が覚知(認識)するあらゆる「もの・こと」を、宇宙に存在すると認識する万物をどんどん切り刻んで行く、例えば私の肉体を細分視して行くと目・鼻・口、足・手、そして内蔵、細胞、DNA・・・、それらの一つ一つを分解して行くと原子に、さらには場所を有しないが位置を占める非局所性の粒とエ

エネルギーを持つ波の両義性を持つ、粒であり同時に波である「素粒子（量子／光子と同義）」に行き着く。精神は見えないと謂えども肉体（物質）付随の脳活動から生まれることから、いずれにしても、無限遠点においては構成部位間の境目・垣根・枠組みが消失した素粒子の世界、すなわち『無・空』の世界になるという。私はこの究極界を「**Z P F**（ゼロポイントフィールド）」と称している。

3. 纏めてのキーワード「華嚴界 ZPF」とパラレルワールド／図(表)－4

この哲学的「縁起・華嚴界」と科学的「素粒子・ZPF」の『無・空』世界は空っぽでは無く、同じ性質の無限エネルギーを有し、その観方を拡張すると、この世「眼前の見える宇宙」の万物、森羅万象に係るあらゆる情報がどこかに消滅するのではなく、意味のある情報として共通する『無・空』－「**見えない別宇宙**」と称する世界に溶け込んで行くという。私は[華嚴界 Z P F]と称している。

様々な呼称がある。「^(前)眼前の見える宇宙」を「この世／明在系／デイサイエンス」、「^(後)見えない別宇宙」を「あの世／暗在系／ナイトサイエンス」と称し、後者には前者の全ての物質・精神・時間・空間などが全体として畳み込まれている、逆に、前者のどんな小さな一点にも後者の全てが反映しているという。前者・後者の両方を合わせてパラレルワールド、多次元世界、あるいはホログラム（3次元情報が2次元面上に記録されもの）世界とも称される。



眼前の見える宇宙にいる私は「^前私は皆と繋がる私」と「^後私は一人である私」の両方の二律背反的な立ち位置を自覚する。

まずは直線的視座からは、
それでは、前者について“お前は何者だ”とどこまでも『縁起』思考で繋がりを求めて行くと、華嚴界に行き着く。後者についても“お前は何者だ”とどこまでも『素粒子』思考で分解して行くと、ZPFに行き着く。この私をマクロ・ミクロのどちらの攻め方をしても他との境目が無い世界「**華嚴界 ZPF**」(＝**見えない別宇宙**)に行き着くのだ。

また、並行的視点からは、眼前の見える宇宙にいる私と係る総ての情報は、「**見えない別宇宙**」(＝**華嚴界 ZPF**)に畳み込まれて行くのだ。

4. 両軸複眼同時照射で認識する新しい世界観

常識的普通の見方（先入観で凝り固まった捉われ）を離れ、反転の見方――正→反→合、肯定→否定→再肯定――に止揚して行く。眼前の「もの・こと」に対して、図(表)－5のと通りの「両軸複眼同時照射／複眼透視思考」を意識すると、新しい世界観が開発される、眼前・従前の事象が丸ごと「華嚴界 ZPF」で更新される――と認識するようになり、こちら・自身・観察者の心が豊かになるというもの

である。「もの・こと」に対して両軸複眼思考を同時照射すればこそ真理・本質が見えて来るということを学ぶ。**両眼（両軸）ならびに同時が肝である。**

(Parallel & Kegonkai Zpf) → Pioneer Knowledge Zoon PKZ (先駆者的知識開発領域)		
両眼の機能・意味合い		
「不二如」の視点	Aの眼	Bの眼
	陰	陽
	正直視	反転視
	差別 しゃべつ	平等
	分別	無分別
	事(じ)／現実	理(り)／理想
	有体	無体
	正	中
華嚴界 ZPF	縁起	素粒子
パラレルワールド	眼前の見える宇宙	見えない別宇宙
PKZ		
両軸複眼同時照射／複眼透視思考		
図(表)－ 5		

(華嚴界の縁起)

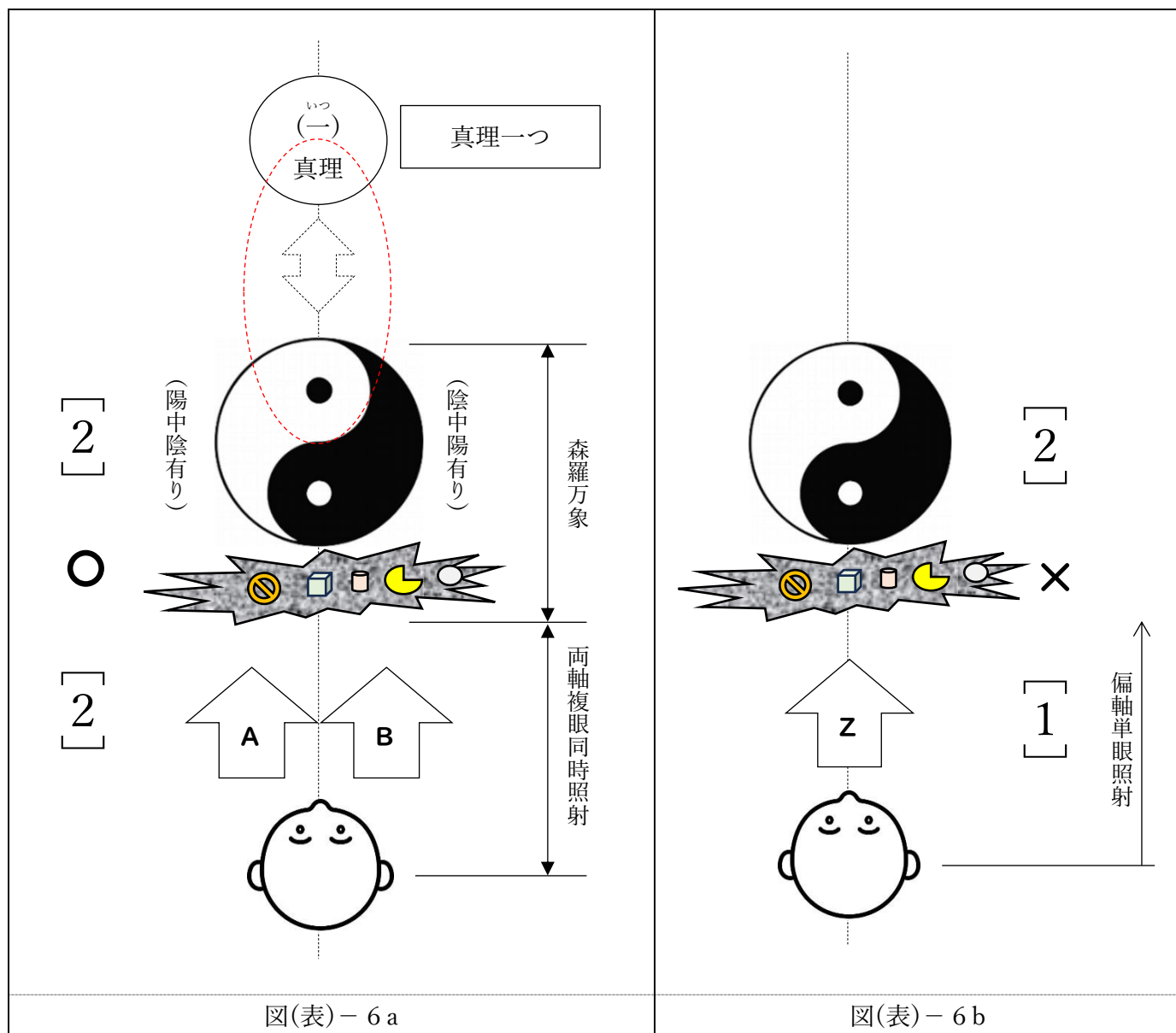
(ZPFの素粒子)

「並行的華嚴界 ZPF」を言い換えると、心理学（仏教・宗教・精神の意味を含む）と科学（物理学・量子学を含む）の融合の果実（客観性として当てたもの）である。個人で言えば過去・現在・未来の総ての情報は、折りたたまれてその人の体内文化となっているのだ。逆に、その体内文化から日常の心・言・行が顕現するのである。

両軸複眼同時照射は、「もの・こと」を複雑化し、かえって、自家撞着・矛盾相克に陥り精神分裂の弊害が生ずるのでは？と自問するが、実は逆なのである。

図(表)－ 6a で説明する。世の森羅万象（もの・こと）は、単純化すると「陰陽魚眼太極図」——宇宙の陰陽二元相對（待）性原理を可視化した図柄のとおり陰陽二元（二値）の構成に為る。それも他方で、宇宙創成の原初に遡れば総てが統合された「一」、すなわち真理一つにたどり着く。

そのことを踏まえ、よって複雑な世の諸現象「もの・こと」を両軸複眼同時照射、複眼透視思考で向き合うと、裏側の陰陽二元要素と共振・共鳴し—— [2] ○ [2] —— 2 値単純化に整理されて、さらには原初（初源）に自然誘導され、真理一つに到達して行くのである。真理は一つである、前段における華嚴 ZPF と同義である。まさに「一」に単純明快化され「Simple is the best」に一件落着！ だから蒙昧しない。



ところが、在来型偏軸単眼照射では、図(表) - 6bのとおり、1は2と異なることから共振・共鳴、つまり、同期化作用が働かない——[2] × [1]——、したがって、そこでストップ、その先には進まないのだ。よって、真理に到達し得ず、枝葉末節の先端破裂に雲散霧消し、自ら複雑化を起し、かえって、蒙昧に墮落するのだ。これらの流れは宇宙の普遍性自然原理なので、個人の思惑などの人工的・人為的細工を許さないのだ。

以上のようなことから、個人のことにしても、人間関係集団のことにしても、本来は境目が無い世界なので、保身的利害損得の私欲を離れ誠心誠意を以って、対応すれば、無用な感情的対立は起らないというものであることが理解出来る。

これらから端的に学ぶことは、精神(思想信条)の中断なき「スクラップ and ビルド」である、しがらみとか腐れ縁を断ち切った真の自由境地を獲得することだと思っている。

5. 「関係性が先にある」

華嚴經に関する解説は学者が書いた数多の論文がある中で、木村清孝著「さとりの道(華嚴經に学ぶ) / NHK 出版」から一つだけ取り上げる。

「すべてがすべてと関連し合う、そういう全体的な関連性の網が先ずあって、その関係的全体構造の中で、はじめてAはAであり、BはBであり、AとBとは個的に関係し合う」という処である。

素人の言い方をするが……。普通は「先ずはAとBという個の存在があり、AとBは厳然と違うものである、その上で、他を含めた全体的な関連性の網が出来る……」という時間軸を以って認識する、“いやいや、それでは仏教の最も忌避する拘りや我欲を認めることになる、それでは、華嚴の世界観をわざわざ作るのが無かったのだ、そこで、常人では分かり難い仏教の世界（もともと始祖の仏陀は『縁起』ということ説いている）を特徴付ける・象徴付けるために、あるいは、神髄を表記するために、先にあるのは全体的な関連性の網であるという論拠を考えたのではなかろうか。全体的な関連性の網の究極は、個々の境界が無限に薄くなった、あるいは、個々の境界が外れた世界となり、すなわち『空』である。

しかし、『空』で終わらせない。「心、^{もろもろ}諸の如来を造る」「すべては心の表れである」と普通の感覚に戻すのである。まさに「色不異空－色即是空、空不異色－空即是色」の世界観である。

こんなことをつらつらと考えると、**私は、毒牙（オレ我、俺我の独我）を捨て、対等互啓（恵）をベースに共学・共創の意識が強い人が集まった仲間にとっても楽しい人間関係を感じる。**

そういう人間は、深層心理の中で「中道正観」――仏教の最深層心理、阿頼耶識で培われる――が価値判断の基軸となっている性格なのだろうと思う。思想信条がどちらかに、何かに偏っている性格は、初めから特有の色が付いているために、それがフィルターとなって、やがては悪玉障害と変化してひょこっと出る、それが我欲・毒牙（独我）の発現である。

人間の不断の向上心は、持って生まれた時に備えられた飽くなき挑戦意欲・好奇心が燃料となって自家発電しているのである。

6. 私のつたない短歌

図(表)－**7**は、私の4回目の四国霊場歩きへんろ――2024（令和6）年春／75歳において実施した時に浮かんだ短歌の投稿である。2首共に華嚴の世界に結んだもので、別記のと通りの七色のキーワードを取り上げたのも華嚴世界と透徹するものを感じたからである。

「集い来る生まれも育ちも違う人 違えばこそ**華嚴**の仲間」

「お日様の白き光の散らばれる ^{ほぜん}歩禪行場に**七色**の虹」

やましん歌壇

規定募集 やましん歌壇への投稿は、郵便は作者の住所、氏名、年齢、電話番号とは他紙への二重投稿はお断りします。山形新聞社編集局 やましん歌壇係

布宮雅昭選

射干の花一面群れて田仁の入定窟へと吾を誘ふ

山形市 折原 広子

【訓】立石寺に開遊である慈覺大僧侶に
が定したと伝えられている洞窟がある。
作者が訪れた折、ちょうど射干の花
が盛りであつた。その射干の花が、作者
を入定窟へ誘つているようたという。心
豊かに歌である。

【評】メダカは、妹さんが飼っていたのであろう。それを作者に託されたのである。そのメダカの卵は無事孵ったが、妹さんは亡くなってしまうという、悲しみにつながるメダカの思い出である。

井上 管子選

朝霧の上がりて朝日連峰が「登ってこいよ」と老いのかうたう 朝日町 菊地 幸子

【評】若い頃何度もう登った朝日連峰なのだろう。「登ってこいよ」は「また登ってこいよ」と言っているのだ。親しみを込めて山に言われた言葉に懐かしさがある。

の修羅へ
山形市 折原 広子

【評】 鳥が魚を獲うのは一國の出来事。海面は波も立たない穏やかさでも、獲物の魚には修羅場である。美しい風景、兵にある弱肉強食の摂理を修羅と言った。去年逝きしが大しつばを振つてゐる盆に贈るのすのろの花火に 上山市 新寺 登

佐藤 幹夫選

朝露に濡れて挽めるメヒシバの差し交す穂のかすかにそよぐ

村山市 佐藤 莚平

二十歳なる時、あはれくはるるの山に雲の霞
 が仰て穗をうらくるの白浪の浪 群れ
 立、春の挽の美しに魅かれ、露のた
 くまよひを待てて春する。
 二十歳をへ賀集に背はけし五葉の葉を拜
 む九十歳 長井市 高橋 千代
 二十歳となつた花嫁の戸を開かれ
 て縁前に立つ十九歳の春を、夏夏と
 見守つてゐるをぞ、読み添へるに「拜
 む」姿の尊くは庄倒れる歌。
 空青の縁の風の中をそくく走らん沢
 村 東信子 杉葉穂子

と老い妻励む
長井市 渡部紀二六

【評】長井地方に、江戸時代から伝えられている黒料理があるという。奥さんがその料理を孫に伝えようと奮闘している。伝説が、受け継がれうれしいことである。どんな料理なのか興味もそざられ

巴朝に面する似たる山嶺の粗犷の遺影の前に
 て一席　秋田風八郎藩町　三浦　政博
 戦終へて　その林樾を翳り合ひてゐる二女母よ
 純色のを穿りし時に爾が形　麻痺粗む仲木
 洩れぬやゝある　山形市　朝倉　正敏
 孫孫と見せし蔵王雨野宮登山た羽鳥の磯に
 のぞく　上山市　羽鳥　多男
 若いいたと隣の庵に免託証送したる徒先に
 廻りて　大井町　柳川　次郎

集いくる生まれも育ちも違ふ
華嚴の仲間 山形市
旅の夢台風前に泡と消える

ず
河北町

この夏の冷やし中華のリクエ
ーの薄焼きたまご 酒田市新
通学路舗装とライン完成す
わやか

朝日町

あり	り満月覗く 台風の掠め過ぎたる朝空に秋	新庄市 村山市
----	------------------------	------------

居合する弟の動画の迫力を鼻
九日忌 朝日町
根っからのスポーツ音痴がテ
手に指示の声上ぐ 白鷹町
世も変り何の役にも立たぬは
え聞かせる 上山町

わが村の盆公演の薪能に帰省
もせず
一席目座布団までの距離のち
れ「人」の字を呑む
長井市
秋田県八郎潟

でコキアと名乗る 天童市
いいにおいと得意満面三蔵自
はしんしゃなんだよ 米沢市
お日様の白き光の散らばれ
色の虹 山形市

夫の背寂し 天童市

夜明け前虫の鳴き音に目が覚める
りいつしか眠る 山形市
終戦後羊飼育し毛系取る亡母の手
き温かりき 白鷹町
汗対策額鉢巻き首タオル勇ましき

人生の裸一貫業しけり吾に野良肴
油絵はいいよねといふ聲がする教
四 五人 村山市
川風と山の木々とに囲まれて冷え
いで目ざめぬ 東根市
能面の笑くぼの影に重なりて悲し
の舞 米沢市
人生を乗り切る道の難しき参り
語る 山形市

人違えはこそ
大沼 香
あ坊三刀及ば

阿部 伸子
スト完全マスタ
橋 佐藤志津子
らの挨拶元氣さ
海野 寛

泉芳子
を知らせて鱗雲

茨城県
水戸市
西町
栄移の中に
形市
滅の恐れ
岡田市
便り励ま

齊藤隆夫

羽島 多男	海老名 慎一郎	児珠 純子	つめて見る四十
赤れ世界	もせず善	石田町	緑陰求め

の客ら身じろぎ
渡部紀二六
り出囃子に押さ
町 三浦 政博
今ではカフエ
形市

佐藤裕紀子
村上天千代
歩禅行場に七
大沼香

色ひぐら
田田市
ふるとと
形市
の声妻通
浜市
聞き孫と
浜市

図(表) - 7